



1 資本主義社会への批判

▶ pp.119 ~ 120

疎外（そがい）された労働—マルクス

疎外された労働は人間から、(1) 自然を疎外し、(2) 自己自身を、人間に特有の活動的機能を、人間の生命活動を、疎外することによって、それは人間から類を疎外する。すなわち、それは人間にとって類生活を、個人生活の手段とならせるのである。第一に疎外された労働は、類生活と個人生活とを疎外し、第二にそれは、抽象（ちゅうしょう）の中にある個人生活を、同様に抽象化され疎外されたかたちでの類生活の目的とならせるのである。……

同様に、疎外された労働は、自己活動を、自由なる活動を、手段にまで引き下げることによって、人間の類生活を、彼の肉体的生存の手段にしてしまう。……こうして人間の類的存在を、すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも、彼にとって疎遠な本質とし、彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は、人間から彼自身の身体を、同様に彼の外にある自然を、また彼の精神的本質を、要するに彼の人間的本質を疎外する。

（マルクス、城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫）



2 人間存在の地平—実存主義

▶ pp.121 ~ 123

「絶望は死に至る病」—キルケゴール

人間は精神である。精神とは何であるか。精神とは自己である。自己とは何であるか。自己とは自分自身にかかわる一つの関係である。いいかえればこの関係のうちには、関係それ自身にかかわるといことが含まれている。したがってそれはただの関係ではなくて、関係がそれ自身にかかわることである……。人間は動物よりまさっているからこそ、いいかえれば、人間は自己であり、精神であるからこそ、絶望することができるのである……。人間は自己であり、自己自身にかかわる関係であるというのは、人間が一つの統合であるからである。それは無限と有限、時間と永遠、自由と必然の統合である……。絶望は可能性としては人間の本性のうちに、現実性としては個々の人間のうちに存するものである。絶望は死に至る病である。自己のうちなるこの病は、永遠に死ぬことであり、死ぬべくして死ねないことである。それは死を死ぬことである。

（キルケゴール、斎藤信治訳『死に至る病』岩波文庫）

ニヒリズムとキリスト教—ニーチェ

……神の前ではすべての『魂（たましい）』が平等となったが、しかし、これこそまさしくすべての可能な価値評価のうち最も危険なものである！ ……この普遍的な人間愛が、実際にはすべての苦悩する者、できそこないの者、退化した者どもの優遇（ゆうぐう）なのである。事実それは、人間を犠牲にする力を、責任を、高い義務を、低下せしめ弱化せしめてしまった。……類は、不出来（ふでき）な者、弱者、退化した者どもの没落（ぼつらく）を必要とする。しかるにキリスト教が頼りにしていたのはまさしくこの者どもなのである。それは、弱者のすでにそれ自体できわめて強力な、甘やかし、保存し、たがいに支えあうあの本能をさらに増長した。キリスト教における『徳』や『人間愛』とはまさにこうした保存の相互性、こうした弱者の連帯性、こうした淘汰（とうた）の妨害でないとしたら、なんであろうか？

キリスト教的利他主義とは、万人がたがいに心配しあうなら、各人はいつまでも保存されると推（お）しはかる弱者の大衆的利己主義でないとしたら、なんであろうか？ ……真正の人間愛は類の最善のための犠牲を要求する。——それは冷酷（れいこく）であり、それは自己超克（ちょうこく）にみちみちている。というのは、それは人身御供（ひとみごくう）を必要とする